



採点欄

二

問一

① 仙命聖人(仙命上人)

②

覚尊上人

③

仙命聖人(仙命上人)

問二

サ行変格活用動詞「往生す」の連用形+強意の助動詞「ぬ」の終止形+現在推量の助動詞「らむ」の終止形

問三

仙命聖人は、修行に励むばかりで日常のことは何も知らず、使用人である小法師を使って山の僧たちから食料品を施してもらおうこと以外では、他の誰からも布施を受けなかった人だから。

問四

覚尊上人の、命の危険にさらされた時、「南無阿弥陀仏」を唱えず「あなかなし」と言った行為。

問五

(1) 覚尊が仙命を家に置いて出かけた時、物品に封をして盗まれないようにして出かけたが、それを見た仙命は自分が疑われていると思ったから。

(2) もし物が少しでもなくなったら、きっと仙命のことを疑うに違いないおろかな自分の心は往生の妨げになると思ったから。

問六

(1) 極楽浄土における現世での功德に応じた階位。

(2) 覚尊が橋や道を作るばかりで、念仏を唱える機会はずかだつたことから下品下生になつたのに対して、仙命は仏の教えの真理を思考し、つねに念仏を唱え、友の覚尊にも念仏をすすめたので上品上生となつた。

三

問一

① たちまち

②

ごとし

③

よく

問二

「三代猫を養はざれば(養はずんば)、全家病耗無し」の語有り。

問三

一匹の鼠が一本の箸を瓶の中に突き立てて箸の先をくわえ、もう一匹の鼠が箸をくわえた鼠のしっぽを口で引いて、瓶ごと倒した。

問四

(1) 春にかかった喉がふさがる病気は、冬にますます悪くなり、何も食べられなくなったので、死を覚悟して夜中寝ずに灯火に座っていた。

(2) 意図せず大笑いし、生まれたばかりの小児のこぶし大の大きさの赤いものを喉から吐き出した。

(3) 急に胸がすっきりして、粥が食べられるようになって、十日程で全快した。

問五

葉叟が病気によつて死にそうだったところ鼠たちの行動によつて救われたのは、単なる偶然ではなく、普段から鼠を哀れんで猫を飼っていなかったためだ、ということ。

合計点

氏名

受験番号